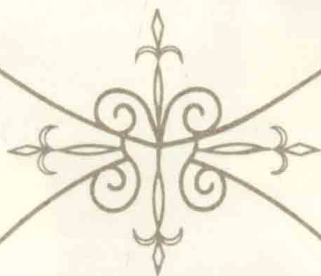


三島由紀夫
全集



三島由紀夫全集



2

II

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

三島由紀夫全集第二卷

昭和四十九年十月二十日印刷

昭和四十九年十月二十五日発行

著者 三島由紀夫

発行者 佐藤亮一

装幀者 杉山寧

三島由紀夫

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一 振替東京八〇八

電話業務部(〇三)二六六―五一一 編集部二六六―五四二

定価 二五〇〇円

第十八回配本(全35巻・補巻1)

Copyright © 1974 YÔKO HIRAOKA Tokyo Japan

三島由紀夫全集 第二卷 目次

盜賊	……	七
ラウドスピーカー	……	一七三
春子	……	一五
サーカス	……	二四三
婦徳	……	二五
接吻	……	二七七
傳説	……	二八五
白鳥	……	二九三
哲學	……	三〇一
蝶々	……	三〇九

殉教	三三
親切な男	三一
家族合せ	三七
人間喜劇	三九
ツタンカーメンの結婚	四五
頭文字	四五
慈善	四七
寶石賣買	四七
好色	五三
罪びと	五四

不實な洋傘		五五
山羊の首		五九
獅子		五五
序章		六七
解題		六五
校訂		六七

三島由紀夫全集 第二卷 小説 (2)

盜

賊

——一九三〇年代に於ける

華胄界の一挿話

第一章 物語の發端

グラッド・パフン
眞劍な戀といふものは何もすることのない

人間の特權なんだ。

——オスカ・ワイルド「ドリヤン・グレイ」

盜 賊

極端に自分の感情を祕密にしたがる性格の持主は、一見どこまでも傷つかぬ第三者として身を全うすることができるかとみえる。ところがかういふ人物の心の中にこそ、現代の綺譚と神祕が住み、思ひがけない古風な悲劇へとそれらが彼を連れ込むのである。彼の固く閉ざされた心の暗室は、古い物語にある古城や土牢の役割をつとめる。彼と他人との間の心の溝は、古への冒険者が泳ぎわたった暗い危険な堀割ともなるであらう。

そして一方、昔の物語の花々しい悲劇の英雄、たとへば悲戀に傷つく勇者、人妻を戀して身を

誤まり獄舎の露と消えた熱血漢などは、現代ではその直情徑行が幸ひして、凡庸な成功者、長壽をたのしむ幸福者となるであらう。

外的な事件からばかり成立つてゐた浪漫的悲劇が、その外的な事件の道具立を失つて、心の内部に移されると、それは外部から見ではドン・キホーテ的喜劇にすぎなくなつた。そこに悲劇の現代的意義があるのである。

そしてそれが、たとへば藤村明秀ふじむらあきひでのやうな自己韜晦たうくわい的性格を通じて、古い冒險譚めいた異様な戀愛悲劇を現出することになるのである。

藤村子爵夫人は強羅がうちの山莊の風光に倦き、その夏を子息と共にS高原のホテルで過した。子爵一人は常のごとく強羅へ行つた。

S高原のホテルはまだ建つたばかりだつた。山小屋風の建築で冬はスキーのために開いた。ホテルの前庭は勾配をなして大池の邊りまで下りてゐた。二階の窓からは日本アルプスと雲との投影がその大池一面に見下ろされた。

子息明秀は今年の春大學の國文科を卒業した。彼は鷹揚に育てられた。休暇毎に父母に連れられて旅行するのが習慣になつてゐたので、學習院の初等科の頃休暇がをはつて先生に提出される日記のなかに、彼のそれほど繪葉書と色鉛筆のスケッチを滿載した浩瀚な旅行日記はなかつた。この寡黙な少年は極めて見處があるやうに思はれた。又一方、極めて頼りないやうに思はれた。これはどういふことなのだつたらう。ともすれば、きはめて頼りのないところが彼の見處だつたのではあるまいか。不安定な果敢さ、又は、鏝しげのよすぎる人間が時として示すあの見當外れの勇

氣とでもいふものが。

そのホテルの滞在が十日に及ぶ頃の午前だつた。明秀は母とロビーへ出て、卓上にちらかされた英文の觀光雜誌を退屈さうにめくつてゐた。S高原では夏が地上へ下りて來ずに高空たかぞろを翼を光らして過ぎてしまふらしかつた。暖爐では白樺が美しい火の色を見せて焚かれてゐた。ふと明秀が、遠い山脈の見渡される硝子屏ガラスのはうをながめやつたとき、風景の底から蜂の唸りのやうなものがきこえてきた。彼は訝かしげな顔を母と見交した。

大池のむかうの急坂をめぐつて上つて來るのは自動車に相違なかつた。帳場の男とふざけてゐた十六、七のボオイが硝子屏の外へとび出して又はひつて來て、「きつと原田さんですね」と言つた。藤村夫人はそれをきくと、「原田さんて大和村の原田さんぢやないかしら。原田さんのをばさまを御存知でせう」「いいえ知りません」と明秀が御行儀よく答へた。

自動車は既に大池のほとりの門をすぎ、砂利の急坂を登り惱んでゐるらしかつた。抑へつけたやうなその音が苛立たしく高まつた。ボオイがまた迎へに出て行つた。

明秀は膝の上の大判の觀光雜誌がずれ落ちるのに任せた。車の方を氣にする母の眼差をわれしらず熱心になぞらうと力めてゐた。子供はよくこんな風な仕方で神祕を期待するものである。母の視線が神祕を喚起する力をもつてゐるやうに子供には思はれるのだ。公園などで、母の裾にかまつて、まはりの未知の世界の賑やかさ、めまぐるしさに驚嘆してゐる子供を我々はしばしば見る。彼はそんな外界の驚異を、母の目の神通力が招き寄せ、それを彼の目の前にくりひろげてくれたのだと信じてゐるのである。

それはさておき、止つた車から眞先に下りた人は、二三段の階段を上つて玄関へ入つて來た。嘗て見ぬほど美しい人だつた。はじめ明秀はその人を平靜な氣持で見えてゐると感じた。しかしそれは麻醉の作用かもしれないかつた。

どこか女丈夫めいた、熱を帶びた潤んだ聲で、令嬢は帳場で部屋のことをたづねてゐた。彼女は時々玄関のはうをふりむいた。外に立つて年配の夫妻が大池や山々を指さしてはボオイに何か質問してゐた。その人たちはやがてゆつくりと石段を上つて來た。

「あら矢張さうだ」と母が立上つた。明秀は愕いた。彼は母のゐることを忘れてゐたのだ。

原田氏は藤村夫人をみとめてその名が思ひ出せない内から親愛な愕きの表情をあらはすことに越度^{きど}はなかつた。二人の夫人はたがひに駆け寄り、學校友達らしい若々しい言葉遣で久闊をのべた。それから藤村夫人はぼんやりしてゐる息子をはげますやうに紹介した。原田夫人は初等科の頃の彼に會つた記憶がある、などときさくに話した。その時一つの影が近づいてきて、うつむいてゐる明秀の靴を翳^{かげ}らした。

「美子でございます」と原田夫人が言つた。藤村夫人はしげしげと令嬢をながめた。それのできぬ明秀はいたく母を嫉ましく思ひながら、目を伏せたままその人と挨拶を交はした。

朝と夕方は霧の跳梁に任せられるので、草が乾く間^まは日の高い内に限られてゐた。周囲の山々がかがやかな日差のために、多彩な混色とくつきりした翳を取戻すのは、一日のわづかな時間だつた。

N池の周邊は鬱蒼とした森にかこまれてゐたが、ところどころ水に接して置き忘れたやうな草地があつた。そこで美子は明秀の膝にもたれて午睡をとるのを目課とした。最も危険な安全さが彼女にとつて最も居心地のよい場所だつた。のみならず女一般にとつて、さういふ安全さを描いて、眞の安全さといふものはないのだから。彼女は夢うつつに、森の奥でしてゐる小瀧の響をきいた。彼女はまた夢うつつに、自分の上をよぎつてゆく雲の翳を感じた。明秀が彼女の眠りを妨げまいとして膝をほんのわづか動かすことさへないので、彼女は自分が枕にしてゐる膝の持主をやすやすと忘れることができた。

この愛の兆を發見したのは藤村夫人よりも原田夫人の方が先だつた。夫人は經驗上、娘の變化に注意するまへに、娘の相手の變化に注意してそれと知るのであつた。おとなしい行儀のよい青年が、熱つばい目附とそれを裏切るやうな皮肉な笑ひをうかべだした。それから彼は食事の時、原田夫人の問ひかけに見當外れの返辭をした。藤村夫人は見かねて息子をたしなめた。たしなめながら彼女の赧くなるのが、ただただ、息子の無様な振舞だけで頭を一杯にしての結果だと氣づくとき、原田夫人は俄かに不安を覺えた。

今年の夏を葉山ですごさずわざわざS高原へ來た意味がうすれて來る。毎夏葉山で美子のまはりにおこる無數の小事件がわづらはしさに、今年の避暑地を、交際の不要なS高原に選んだのではなかつたか。原田夫人にはこれから起るべきいざこざがありありと目にうかんだ。のみならず忙しい體の良人は來て二三目目に歸京してしまつた。夫人は娘を見てゐるだけでも疲れるのであ

つた。

まもなく美子と明秀との長い散歩の日課がはじまつた。それでも藤村夫人は氣がつかない風だつた。

原田夫人はむしろ息子の一舉一動に敏感であるだらう藤村夫人の神経質な母性愛をたよりにしてゐたのであつた。それが今では、藤村夫人の、何事にまれ自分が信じたくないことは信じずにゐられ、氣づかずにゐたいことは氣づかずにゐられるといふ頑なな心の構造にほとほと呆れるばかりだつた。藤村夫人のやうに平和な環境に數十年を送つた人には、かういふふしぎな心の動き方が、つまり無意識界をも支配できるやうな鞏固な平和の意志が、そなはつてくるものらしくつた。

夜更けの露臺には誰も居なかつたので、明秀は美子をそこへ誘つた。頬のほてりを癒やしたかつたのだが、ここでは夜風も霧も彼には火のやうに思はれた。——美子は黙つて手摺に凭れてゐた。

「何を見てゐるんです」

美子はこの場合誰でも手持無沙汰に言ふその言葉が異様な嚴肅さを帶びてゐるのがをかしかつた。返辭をする前に彼女は霧にむかつて軽くまばたきした。

「大池の方が……」

さう言ひかけて彼女ははじめて大池へ目を移した。するとそこに見られた情景の凄じさが次の